

四旬節第5主日  
ヨハネ 11・14-5  
ラザロの復活

2014.4.6  
長崎 壮  
(クラレチアン宣教会助祭)

集会祈願で明らかなように、今日、四旬節第五主日のミサは、洗礼志願者のために祈るミサです。復活徹夜祭の典礼の中で行われる洗礼式が近づいて、志願者の方たちは希望に燃えていることでしょう。すでに洗礼を受けた私たち信者にとっても自分の洗礼を受けた日のことを思い出す機会ともなりますし、受洗者を教会家族に受け入れることができますよう祈りましょう。気持ちを新たにしてもらいたいと思います。

さて、今日読まれたラザロの復活について考える前に、皆さんは先週読まれたサマリアの婦人の話を覚えていますか？ 水についてのイエス様とサマリアの婦人の会話の中で、「わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る」（ヨハネ 4・14）とイエス様はおっしゃいましたね。ここでいう「わたしが与える水」とは、人を永遠の生命に至らせる「神の御言葉」、あるいは「聖霊」であると言われていますが、それがラザロの復活によって現実のこととなったのです。

ラザロの復活は、典礼の中でこれから祝うイエス様の復活を思い出させるとともに、私たちの復活をも考えさせます。なぜなら私たちは洗礼によって、キリストと結ばれた者となり、キリストと結ばれた者は、キリストの死と復活にも与るからです。

「生・病・老・死という人間の根源的な不安から完全に解放されて神様のお側で愛する人々とともにあり、完全に満たされた状態となるのでしょうか」ということ以外に加えて、死後のこと、復活のことについて具体的なことを言い表すことはできませんが、復活の約束は、死後のことだけではなく、この世にあって私たちの生き方まで変えられていくはずで

人々が外出を避ける時刻を見計らってヤコブの井戸に水を汲みに来たあのサマリアの婦人は、イエス様と出会い、その御言葉を受け入れたことによって、以前と全く違う生き方、キリストを人々に告げる生き方へと変えられていきま

した。

死んだら終わりという価値観で生きるならば、生きている間にどれだけ地位や名誉を得て、あるいはどれだけお金をためて楽な生活を送るかのみを考える利己主義的なあくせくした生き方になるでしょう。しかし、死が全ての終わりではなく、この世的・世俗的な価値観が全てではないことを信じる私たちは、世にあって、世俗の価値観から解放されて生きるように招かれています。自分の中にと自己の中に閉じこもる利己主義的生き方から、自らすすんで人々の隣人になる、他者に開かれた生き方です。人が困っている姿に黙ってられない姿勢、与えられること、人からしてもらいよりも与えることに喜びを見出す生き方です。

今私たちは四旬節という節制を奨められる期間にいますが、節制は単に自分を鍛えるための手段や、自分を鞭打つ修行のようなものとは違います。論語に「徳は弧ならず必ず隣りあり」という言葉がありますが、これは「隣人との関わりを抜きにした、自らのうちに閉じこもった形での節制では何の役にも立ちませんよ」ということなのでしょう。

私はここ数年、四旬節になるとたびたび思い出す言葉があります。4世紀の司教であり、教父として敬われる聖バジレイオスは当時教会の中で目立つようになってきた貧富の差を黙認することなく、「あなた方の腐って捨てる食べ物は、飢えた人々の食物なのです。あなた方の家で使われることなく置かれている靴や衣服は、裸足で歩く人の靴、着るものがなく、寒さに凍えている人の衣服なのです」と語っています。今ある私たちの生活の裏で、苦しんでいる人々がいることを忘れないように、せめて祈りの中でもその人たちとともに歩いていく姿勢をもちたいものです。

さて、最後にもうひとつ皆さんにお伝えしたいメッセージがあります。今日の福音の中にはイエス様が「憤られた」とあります。これはイエス様の言葉を信じない人々に向けられています。もし私たちがラザロの復活のその現場にいたならば、やはり「死者の甦り」など常識を超えた出来事が目の前で起こるなど簡単に信じるわけにはいかなかったのではないのでしょうか。

しかし、こういった人々の反応と対照的に、著者ヨハネがイエス様に従う者の模範として示しているのが、ヨハネ福音書の中で最初の奇跡の場、カナの婚宴におけるマリア様の姿です。披露宴の最中、ぶどう酒がなくなったことに気づいた召使にイエスは「水がめに水を満たして持っていきなさい」（ヨハネ2・5）と命じ、水がぶどう酒に変わる奇跡が起こりました。給仕するもの皆が慌

てたであろう状況にあっても、マリア様は、「何でもこの人（イエス様）の言った通りにしてください」と一言、言います。この一言にマリア様のイエス様への信頼とイエスに従う者の理想的な姿があますところなく現れているのではないのでしょうか。

この世においては、神様は私たちに安楽な生活の保障はしてくれません。しかし、この世のたびの途上で、どんな困難に出会ったとしても、イエス様とつながっている、イエス様がいつも共にいてくださり、必要であれば、必ず助けくださるといふ復活に基づいた信仰ほど私たちの歩みを力づけてくれるものはありません。

私たちもカナの婚宴のマリア様のように、イエス様に信頼して信仰の歩みを続けていきましょう。